九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

看護における清拭の考察

岡本, 陽子
九州大学医療技術短期大学部看護学科

https://doi.org/10.15017/179

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 15, pp.41-45, 1988-03-28. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

看護における清拭の考察

岡 本 陽 子*

Bed Bath in Nursing

Youko Okamoto

1．はじめに

看護は日常性である。看護は患者の日常生活全般にわたって援助する。看護はそのことによって患者の自立を促進する。その意味で看護は単純な技術ではない。看護はひとりの人格をケアする。それゆえ，そのケアには，人格に対する尊敬と礼節を含む。技術は患者をひとつの客体とみるので，患者は操作される対象となる。操作される対象とは，基本的には機械及び抽象化された物体である。従って看護は技術ではなく技能というべきである。

看護は技能によって日常生活に関与する。[1] 看護はここから遊離してはならない。ところが，看護の有効な方法を確立しようと急ぐあまり，この日常性を遠ざけようとする動きは常についてまわる。看護の科学主義化[2]ないし技術化はそのひとつであろう。本来の看護はこれに抗する。看護は日常性である。この日常性こそ看護の原点であり，学問的探究が切望される領域である。

看護の日常性とは，看護が極めて患者の身近な活動に関わっているということである。たとえば，この活動に必須なもののひとつに身体の清拭がある。清拭は高度の専門的技術ではない。むしろそれは日常の技能的活動である。そのために清拭が患者にとって必須な活動であるにもかかわらず，それは研究のカテゴリーから除外されがちなのである。しかし，看護が日常性にあるということを確認するならば，ケアとしての清拭は，看護の基礎であり，学問的探究を不可欠とする。この小論は，清拭という具体的看護活動を検討し，その意義を明らかにする。

2．ことばの分析

広辞苑，[3] 大漢和辞典[4]は「清拭」ということばを記していない。このことばは十分な市民権を得ていない。特殊な専門用語なのであろう。「清拭」[5][6][7][8][9]は bed bath の翻訳であろう。翻訳であるにしてもすでに漢字に訳されたとき，このことばは日本文化を表現するのであり，清拭を行う看護者は，清拭という漢字のもつ意味に意識的かつ無意識的に影響されるのである。つまり，「清拭」ということばは，bed bath に比してはるかに患者と看護者の心身に働きかける豊かなイメージを呈するのである。その点でことばはすでに行為である。[10]

それでは「清拭」はいかなる言語であろうか。まず，「清」とは何か。「清」は水がすみとおるさまであり，きよい，きよらか，あきらか，きよめる，すずしい，いさぎよい，けがれがない，あざやか，やわらぐ，おだやか，しずかなどを意味する。[11][12] したがって，「清」は水を用いて単に汚れを落した状態ではなく，きよめられて，やわらぎ，おだやかで，しずかな，けがれのない心身の状態を表している。その状態はなかば

＊九州大学医療技術短期大学部看護学科

宗教的境位をさえ含んでいる。「拭」もまた，ぬぐう，きよめるである。「式」は呪具の工をもってものを清めはらうの意とある。[13] もって「拭」は清め拭うのである。こうして，「清拭」は清めるという心身への働きかけを含んだことばであることが明らかである。

3．清拭の感覚的位相

清拭は身体諸感覚とりわけ触覚，温覚，痛覚などの皮膚感覚を刺激する力学的活動のひとつである。看護者の手の働きによって，柔らかい布と温水とが患者の身体に触れ，その感覚を刺激する。この感覚は俗にいう五感の中でも特殊な地位を占めている。まず，この感覚は接触的刺激によって体表に生じる。他方，味覚，嗅覚，視覚及び聴覚は特殊感覚すなわち特殊な構造の感覚器を有して，その刺激が脳神経を経由して，その刺激が受容中枢へ伝達される。いわば，皮膚感覚は体表全体で刺激を受容する，一般的かつ原始的感覚であるということができる。その点で皮膚感覚は人間の生命にとって根元的感覚である。[14] これによって人は外界，物体の存在をたしかめるとともに，自己の実在をたしかめるのである。ちなみに，「たしか」めるとは「てでしっか」とつかむことに由来するという。「てでしっか」が「てしか」「たしか」に変じたというのである。これは manifest（明白な，たしか）ということについてもいえる。この原型は mans-fetus，つまり手ーしっかりである。[15] これがラテン語の manifestus を生み，manifest に変じたという。したがって，眼で見，耳で聴き，嗅ぎ，味わうことの何よりも体性ー皮膚感覚によって触れることが知覚の充足感を換起するはずである。

ふれるということは，体全体の根源的知覚認識である。感覚の生理学的検討と並んでふれるということばの分析はそのことを鮮明にする。もっとも「ふれる」ということばは，生理学によって命名された体性感覚ー皮膚感覚よりも先にあったのであり，人間の身体感覚もことばによって分節されることによって出現したのであるから，「ふれる」ということばの分析は，生理学的検討よりも根源的である。「ふれる」は「みる」「かぐ」「きく」「味わう」に比べて主語，述語，目的語があいまいである。たとえば，「わたしは犬の尾を見る」「わたしは犬の尾にふれる」とを比較しよう。先ず明らかなことは犬の尾「を」と犬の尾「に」という目的の助詞の相違である。「を」は対自を，「に」は近接を意味している。きく，かぐ，味わういずれも助詞「を」をとる。次に，犬の尾を主語にしてこの文を構成してみよう。すると，「犬の尾が私を見る」「犬の尾が私にふれる」の文が成り立つ。ところが前者は文として成立しても意味を考えていない。しかし，後者は意味を成す。ということは，「ふれる」という動詞が，主語ー目的語，主体ー客体の相互転換及び交流を可能にするということである。「ふれる」は「わたし」という主語を絶対化して他を従属させることではなく，わたしと対象とを結びつける動詞なのである。「ふれる」は自他癒合的状態をつくり出す。爽やかな大気にふれるとき，わたしは大気と癒合しているのである。したがって，「ふれる」は自己呆失的な雰囲気をかもす。人は神々しい霊気にふれて，気がふれ，それになるのであり，雄大な自然にふれてわれを忘れるのである。われを忘れるとは，たとえば「私を見る」というときの主語としての「わたし」を忘れる情況のコンテクストに自己をおくことである。表層にあるわたしを忘れることによって人は本来の自己の心身について目ざめ，自己の自立へと一歩を進める。ふれることは肉体を身体として結合し，そのことによって他人の身体へと自己を自由に転移させるのである。人の身になる，身につまされる，身をやくのはこの謂であり，共感なるものはこのことを意味するのである。[16] ここでは「ふれる」とは交流である。それゆえ，「ふれる」は人間の身を介して原始的位相から超越的位相へとゆきわたることばである。こうして，清拭は「ふれる」ことの位相をも射程に入れることになる。

4．清拭の要求

患者は清拭を要求する。まず身体がそれを自然に欲求する。身体の分泌物及び外界の物質から成る汚れは，身体に付着する異物であり，それは異和感を生み，不快感を与えるであろう。したがって，身体はこの異物を排除することを欲求するであろう。これは人のみならず，小鳥，犬，猫などでも見られる自然の行動であろう。清拭はこのように，身体の自然的欲求を充足するのである。

しかしながら人間は，ことばを用いることによって身体の自然的欲求を越え出る。たとえば，現代の「清潔」ということばは，自ら身体をきれいにすることを欲し，またそうせざるをえないような強制力をもつ。人は自然的欲求だけではなく，ことばによって多様な要求をつくり出すのである。その意味で，ことばは行動であり，かつ要求なのである。それゆえ，身をきれいにするということも，ことば，すなわち，文化と歴史によってさらに個人の経験，いわば主観ないし，情緒によって変容する。たとえば，毎日顔を洗い，歯を磨くことは普遍的なことではない。日本の中世においてはそうであったし，現に，こどもはとくに幼いこどもなどはそれをしようとしない。「汚れ」ということばに対しても強い拒否反応を示す人もあれば，そうでない人もある。しかしながら，現在の日本の文化一般は身体をきれいにすることを価値とみているし，多くの患者は清潔を欲するのである。身体が欲する以上に患者の心理が欲するのである。それゆえ，患者は清拭によって気分が良くなった，気持が良かった，さっぱりしたと語るのである。[17][18]

5．看護としての清拭

清拭は看護行為の中核におかれてきたが，今もそのことに変わりはない。清拭は科学的合理性の領域で検討される。ここでは清拭は皮膚の汚れ，退化した表皮いわゆるあかなど，細菌の感染源となるものを除去するのである。[19][20] 清拭は皮膚の清潔さ，衛生のために必須である。さらに，清拭は皮膚を刺激することによって，血行を良くし，内臓の活動を高め，疲労や不快感を取り除く。[21] また，清拭後体温や血圧が下降する傾向があるため，[22] 身体にゆったりとした爽快感を与える[23]ことになる。以上の科学的合理性を看護としての清拭は貫徹する。

しかしながら，さらに清拭は患者の心身についても立ち入った働きをする。すでに明らかにしたように，清拭という行為は，患者にとっては文化的，歴史的イメージをもって響いている。清拭は科学的合理性の貫徹のみならず，美的，倫理的，宗教的な意味を含むことばなのである。したがって，患者は清拭という行為に心身をもって反応する。それは感情的な反応であり，主情的反応であるといってもよい。むしろ患者にとってはこの方の要求が強いといえる。患者にとっては科学的衛生思想などよりも，まず，長い間，風呂に入っていないといった習慣の中絶が苦痛なのである。日本人にとって身体を洗うということは，世間の人並みに美しくきれいに生きるということである。清拭がこのように患者の要求に答えるとき，患者はひとごこち（人心地）がついたというのである。

人は身体が汚れたとき，心も汚れたような気分になる。そして気が滅入るのである。身体は本来身であって，身は御身，身共とあるように人そのものである。それゆえ，身が洗い清められたとき，人は「生きかえったような」「生まれかわったような」気になるのである。それは古い身がとり除かれて新しい身が生れることである。これには日本文化が有する清め，みそぎといった宗教的心意も無意識のうちに含まれているのであろう。清拭は患者に対してこのような清浄と再生の行為でもある。これは理想的な理論上の事柄ではない。清浄と再生と称するのは身が変化することである。清拭は身の変化，古い身からの離脱を促す。適度な温水と布が身にふれるということは，まさに表層のわたし一身を離れて深層のわたしへと立ち返ることである。患者は清拭において眠入るようなくつろぎとやすらぎを得る[24]ことがある。苦痛が和らぎ，

悩みを忘れ，自我を放擲したひとときを患者は生きる。これによって患者は新しい自己へ生まれかわるのである。このような境地を対話と称するなら，これこそ真の対話であろう。たとえば，Mccorkle[25]は接触は看護婦が短時間のうちに重症患者とラポートをつくり出すのに有効であることを実証した。但し，清拭はコミュニケーションそのものではない。もし，清拭をコミュニケーションと見るならば，すべての看護行為が，たとえば注射でさえもコミュニケーションになるであろう。清拭はコミュニケーションを越えたものであって，コミュニケーション以前のものなのである。したがって，清拭をコミュニケーションの手段であると見る考え方は清拭の本質を見誤り，その意義を軽視するものである。

6．清拭の実施

清拭は看護者の眼と心と手の働きを患者の心身へ投入するトータルな行為である。そこには，身体と心，自然の生理及び第2の自然とも称される文化，倫理，宗教などあらゆる人間的活動が凝集されている。

まず，清拭はあらゆる科学上の知識と道具－技術を活用するであろう。年齢，疾患，食事と睡眠を考慮した実施の時期，実施の方法，適切な温湯，ウォッシュクロス，バスタオルの使用法，[26]衣類や寝具及びスクリーンの準備，室温の調整など外的環境の整備，身体各部における清拭の順序，圧迫と速度の適切さ，石けんなど浴用化学品の選択，清拭のプロセスにおける患者－心身の反応，その観察など科学的合理性はそのプロセスにおいて貫徹される。しかも，患者は科学的合理性だけでは貫徹されることはしない。患者は歴史的伝統と社会文化を座標軸として生きてきた経験の統合体である。患者は個性をもった独自の存在である。

患者は科学的合理性に対して拒否反応をすることもある。たとえば，羞恥によって，ふれることが性的欲求へ転移されることによって，清潔さを医学的必要性の範囲や水準から強制することに対して，あるいは看護者に対する不信によってなど。とくに，看護者は清拭時に患者が示す羞恥を無視できない。強い羞恥は心身を緊張させ，疲労を増しさえする。そして，患者は心身の要求である清拭を拒否することになりかねない。羞恥は人間らしい感情のひとつである。こどもには羞恥心は他の感情と未分化で明瞭に表われない。羞恥心は，自我意識が芽生える青年期から顕著になる。「わたし」という自我意識が他者を意識することによって羞恥心が生まれるのである。心理学一般は羞恥を自己の失敗，ないし弱点を他者に見られたときに生じる心理的緊張という。しかし，これは十分な説明ではない。羞恥は失敗や弱点ではなく，隠しておくべきもの，あるいは隠しておきたい心身の内容を人の目にさらすことによって生じるのである。人の目にさらすということは，心身に人が浸入することを予儀なくされること，従って，自己の心身の一部を放棄することである。清拭において患者は他人に身体をさらされ，他人の視線に自己の身体を暴かれることになる。これが羞恥という心理的痛みを呼び起こすのである。これをとっても清拭が科学的合理性によってだけでは遂行できない所以がある。

む す び

看護は看護者の主体性に依存している。それゆえ，看護における清拭は看護者のもつ共感性と科学的合理的手法の影響が大きいことが予測できる。ここでは，清拭という看護行為は，看護者による単に人間の清潔の欲求を充たすことに専心するだけでなく，それと同時に人間の歴史的，文化的，倫理的存在としての価値に注目すべきことを明らかにした。

人間の清潔への欲求はそれぞれ独自のものである。医療の管理下にある患者の清拭に関する研究文献は少ない。さらに清拭が科学的，心理学的，文化的側面から探究されねばならない。

引用文献・注

1. HENDERSON,V, BASIC PRINCIPLES OF NURSING CARE, P.5, The Devonshire Press Ltd., Torquay, 1961.
2. 〔注〕実証できるもののみ真と見て，そうでないものを知的探究の領域から除外するようなイデオロギー化された科学をこれは指す。
3. 新村出編，広辞苑，岩波書店，1977.
4. 諸橋轍次，大漢和辞典，大修館，1955.
5. 〔注〕西川義方，西川一郎，看護の実際，第17版，p.29，1968 によると，全身拭浄法 sponge bath, bed cleanliness of patient's body と記載されている。
6. 〔注〕大関和，実地看護法，覆刻版，p.45，医学書院，1974 によると，洗拭と表現されている。
7. 〔注〕小倉一春，看護学大辞典，p.1031，メヂカルフレンド社，1986には，清拭 bed bath と記載されている。
8. ALICE L.P., The art, Science and Spirit of Nursing, 3rd. Ed., Saunders IGAKUSHOIN, 1965は The bed bath と表現している。
9. 聖路加国際病院看護手順委員会編，看護手順，p.37，医学書院，1962は全身清拭 bed bath と記載している。
10. 〔注〕この意味において看護者が患者に対して必要以上に外国語を用いることは避けねばならない。外国語は行為へ導く生きたことばではないのだから。
11. 白川静，字統，p.497，平凡社，1984.
12. 諸橋轍次，大漢和辞典，7巻，初版，p.55，大修館，1958.
13. 白川静，字統，p.463，平凡社，1984.
14. 中村雄二郎，知の旅，p.16，岩波新書，1981.
15. 坂本賢三，機械の現象学，p.110，岩波書店，1975.
16. 〔注〕そしてついには「ふれる」は祈りの型をとって身体をふりながら宇宙の実相にふれることになる。宗教における祈りが合掌であることに注目する。
17. 谷真子他，全身清拭に関する臨床的検討，看護技術，23，pp.98～111，1977.
18. 〔注〕清潔の心理学的，文化人類学的検討については次の論文に示唆を得た。中西睦子，清潔ニードとその援助を考える，看護技術，25，p.p.141～149，1979.
19. ROSENTHAL, T., Personal Cleanliness, MEDICAL TIME, 78, pp.497～500, 1950.
20. 福井公明，皮膚の清潔とその指標，看護技術，25，pp.150～158，1979.
21. 吉田時子，清潔の意義，看護，3，p. 3 1968.
22. 桑野タイ子他，安楽のための清拭技術の検討，第5回日本看護学会集録，pp.215～216，1974.
23. 逢坂頼一他，全身清拭の観察，看護，3，pp.53～55，1951.
24. 丸川和子，全身清拭ー就床患者の皮膚の清潔，Mook，No.2，p.100，1982.
25. Mc Corkle, R., Effects of Touch on Seriously ill patievt, Nur. Res., 23, p.p.125～132，1974.
26. 国分アイ，看護実践と法則性，看護学雑誌，36，p.1340，1972.